2023.11.1 No.70

ひゅうまん

～ふつうをささえる～

特集

自治会のこれからを考える（前半）

3年ぶりのでんでんまつり

新連載

スタッフに聞いてみた

お話するのが大好きなＴさん。呼びかけると、この笑顔で応え、周りを明るい雰囲気にしてくれます。

し

編集／発行　社会福祉法人　弘徳学園　TEL(086)272-0625

〒703-8283　岡山市中区赤坂南新町 6-1　FAX(086)272-5751

特　集

これからの自治会を考える

中島　悠
（なかしま　ひさし）

障害者福祉施設ひゅうまんに生活支援員として勤務。自治会にはサポートスタッフの立場として数年前より活動に参加しています。

ひゅうまん（障害者福祉施設）に自治会が結成されて約20年以上が経ちました。近年は感染症の流行もあり、生活が大きく変化した数年だったと思います。今号では「その時、自治会は何を思ったのか」そして次号では「これからのあり方」を2号に渡って取り上げていきます。

利用者の声をきかなければ

自治会とは、「利用者の権利を守る活動」であり、セルフアドボカシー（自己権利擁護）とも言われています。ひゅうまんでは、約20年以上前から大切にしている活動です。どこの施設にも言えることかもしれませんが、入所施設は集団生活の場でもある為、利用者の困り事は多岐に渡ります。20年以上前は「支援」ではなく「指導」の時代であり、利用者の声を聴く仕組みも無く、スタッフに対しての不満・不信、また、利用者同士のトラブル等、多くあったと聞きます。まずは利用者の声を聴かなければと、立ち上がったのが自治会の前身となる「がんがんトーク」だったそうです。その始まりから近年までの取り組みで、利用者自身が感じた変化やスタッフの思いは、※1以前の広報誌にも掲載しておりますので是非一度読んで欲しいと思います。

社会との繋がり

私自身も6年程前からサポートスタッフとして自治会活動に関わっています。その活動の中でも印象的だったのが被災地への寄付です。2016年の熊本地震、また2018年の西日本豪雨に、例年自治会の行事として行っている夏祭りの収益金を寄付しました。始まりは、テレビの報道で被災地の映像が流れるのを見た一人の方が「大変なことになっとる」「何かできることはないか」そんな一言からでした。その方からこの思いを自治会の定例会にて仲間に伝える機会を作り、「寄付という形はどうか」と提案しました。すると仲間からも「やりたい」「助けよう」といった声が多く上がり、行動にいたりました。ひゅうまんの中だけだった活動が社会と繋がった瞬間だと感じました。そして、「ここからさらに自治会の活動も広がりを見せるのではないか」と期待感を抱いたことを覚えています。

すれ違い

順調に進むかと思われた自治会もここで大きな壁にぶつかります。そう、

皆さんご存じのコロナウイルスです。今でこそ制限が緩和された部分もありますが、流行当初は人との接触をいかに減らすかといったことに世の中全体として取り組んでおり、ここひゅうまんでも同様に感染症対策の為に、多くの制限をかけざるを得ませんでした。自治会主催の夏祭りやクリスマス会といった行事はすべて中止に。月一回の定例会もままならない状態でした。加えて、日頃の買い物や外食といったことさえも実施が難しく、「なぜ急に外へ出られなくなったのかわからない」と不安や苛立ちを募らせる利用者の方も複数おられました。いつまで堪えればいいのかわからない状況では当然の感情だと思います。しかし、反対に安全を守る為には制限も致し方ないというのがスタッフとしての考えであり、そういったすれ違いから、利用者とスタッフに今までにない溝のようなもの感じることもありました。

今できることを考える

このままではと思い、もう一度利用者の声を聴くことから始めました。その中で、「確かに行事がなくなるのは嫌だ。しかし自治会は行事を主催するだけなのか」「あの時も寄付をして、出来る事を考えてやってきたじゃないか」「外に出られなくても出来る事はある」「私たちは今出来る事を考えよう」といった意見が挙がりました。話し合いの中で溝も少しずつ埋まり、自治会活動を今に合わせた形で仕切り直すことになりました。

買い物にいきたいんじゃ

『いのちをたいせつにいきていこう』これは自治会立ち上げ当初に掲げたテーマの一つです。そこへ立ち返り、大きく2つのことに取り組みました。1つ目に、全利用者への感染症への知識とそれによる自粛制限への理解を深める事です。コロナウイルスがどういった病気で、どれだけ苦しい思いをするのかといった事をイラストや動画を用いて説明を行いました。当初はやはり納得がいかない利用者の方がおられ、「買い物に行きたいんじゃ、行かせー」と思いを露（あら）わにすることもありました。しかし、何回も話し合いを行う中で「仕方ないんじゃな」と理解を示してくれました。

2つ目に、感染症予防の徹底です。重要性を学び、実行に移しました。今では、皆習慣へと変わり、仲間同士が声をかけながら感染予防に取り組む姿は当たり前の光景となっています。

共に歩む

この3年間の行事は計画するものの、その度に感染の流行期と重なり、ほとんどを中止にせざるを得ませんでした。その為、活動としては止まったようにも見えます。しかし、そういった時期だからこそ、改めて、自分達の生活について考えるきっかけにもなり、多くの対話が生まれました。その積み重ねによって、より結束を強めたとも感じています。行き詰った時にこそ、「自分達に何が出来るか」を共に考え続けることが大切ではないかと私は考えます。

新型コロナウイルス感染症が5類へ移行し、少しずつ制限も緩和されつつあるので、我慢した分思いっきり行事も楽しみたいものです。状況によっては、また制限が厳しくなる可能性もありますが、『この仲間となら何でも乗り超えていける』そう思っています。これからも山あり谷あり、色々なことがあるかと思いますが、共に歩んでいきましょうね。

※1 広報誌のリンク先

4年ぶりに帰ってきた！

でんでん夏祭り（まつりがお）～満天の祭顔～

でんでん祭り実行委員　松田　華澄

一緒に創り上げる

でんでん祭りは、「地域と一緒に古新田を盛り上げる」ことを目的とし、身近な地域の人達と繋がっていくことを大切にしている祭りです。ここ数年コロナウイルスの影響で世間では多くのイベントが自粛されてきました。自粛前、世間では様々な祭りがあり、そこでは、屋台や花火などへのワクワク・ドキドキ感、現地で偶然に友人・知人に会った時の高揚感や気恥ずかし等、会場に行くことでしか得ることができない特別な体験があったはずです。開催するにあたり、あの懐かしい体験を利用者、スタッフ、地域の方、祭りに関わるみんなが共有し、祭りを笑顔で一緒に創り上げたいという思いを込めて「祭顔～輝け笑顔！ぜひご一緒に～」をテーマに掲げ4月から準備してきました。

今回は当日以外の場面でも地域の方と一緒に祭りを盛り上げたいと考え、巨大モニュメント作成にも取り組みました。その名も、お祭り大好き「祭人（さいと）君」です。利用者の方は祭人君の服の色塗りと顔作りの工程を担ってもらいました。服を着た祭人君は福田公民館に1ヶ月間展示され、期間中、地域の方には祭人君の服に夢や希望を自由に書いてもらいました。（その企画や当日までの準備の様子はFBにアップしていますので是非ご覧ください。）

繋がりを大切に

当日は心配していた台風も逸れ、なんとか開催することができました。ですが、風が強く、予定していた紙飛行機・飛ばし大会は中止になり、誰よりもこの大会を楽しみにし、練習を重ねていた利用者の方は「紙飛行機できんかったな～」と悲しんでおられました。地域の子ども達からも「なんで紙飛行機大会ないの」という声もあり、来年こそは大会を実現させたいと強く思いました。

ステージイベントの備中神楽では、迫力ある演舞に圧倒され、泣き出してしまう子ども達も数名いましたが、祭り会場を後にする方々からは「（神楽は）怖かったけど、かっこよかった」「来年も来たい」「花火がよかった」「来年はバザーで他のものを売りたい」といった様々な声をかけて頂きました。

アクシデントはありましたが、来場者はじめ、屋台を出店してくれたみなさん、イベント出演者のみなさん、運営のサポートにあたってくれたパートナー方々など、多くの人の協力があって無事終えることができました。本当にありがとうございました。

当日を迎えるまで「地域に忘れられた祭りになっていないか」と正直不安な気持ちもありました。しかし、蓋を開けると4年前を超す二百人もの方が来場して下さいました。会場を見渡すとあちらこちらに、目指していた懐かしい景色があり、嬉しく思ったのと同時に、地域との繋がりを改めて感じることができました。

今回の祭りだけでなく、日頃、作品展示や地域のイベント事などにお誘いいただくことで、地域の方にでんでんを知ってもらう機会を頂いています。その感謝の気持ちを忘れず、繋がりを大事にし、今後も様々なことを通して地域の方と一緒に古新田を盛り上げていければと思います。

スタッフに聞いてみた！

今号からの不定期連載企画です。福祉の現場で働く私たちが生の声をインタビュー形式でお届けしていきます。

田井（たい）　敬太（けいた）

岡山情報ビジネス学院、保育学科を卒業。
入社して２年目。デイサービスセンターすまいるで生活支援員として勤務しています。

Qまず初めに（障害分野の）福祉の仕事を選んだ理由を聞かせて下さい。

　そもそもは、保育学科だったので、保育士になろうと思っていました。それまで障害者とは関わった事が無くて、怖いイメージがありました。でも、施設実習で障害のある子供たちと、実際に関わって見たら全然そんなことなくて、面白いなと感じました。（障害分野の）福祉の道もありかなと思い始めた瞬間でした。

　そこで、母校の先輩に弘徳学園の職員がいたので、連絡を取って見学に行かせてもらいました。一通り見させてもらった時に、なんだか雰囲気がいいなと思い、それで弘徳学園に就職しました。

Q障害者に怖いというイメージがあったと言っていましたが、他にはどんなイメージがありましたか？福祉の職場はどんなところだと思っていましたか？

　障害者施設のニュースを見かけても虐待の事ばかりで、雰囲気も部屋も暗く、淡々とした日々を過ごしているだろうなと思っていました。けれど、見学に来てからは、活動など、皆楽しそうで、明るい雰囲気だったのでイメージとは違うなと思い、そこから興味を持ちました。

Q（障害分野の）福祉の職に就いてみて、入る前と今では変わりましたか？

　凄い奥が深いなと思いました。一人ひとりで支援の仕方が違うじゃないですか。それが、正解か不正解かも分からないし、（笑顔だけれど）ほんとに利用者が楽しんでいるかということが分からない中で、皆探り探りやっている事は深いし、面白いなと思いました。

Q具体的にはどういったところに面白さを感じますか？

　活動をするのは楽しいなと思います。一年目の時に自分が提案した、うどん作りをしました。工程を考える事は大変だったけれど、先輩も一緒に考えてくれて、利用者も「楽しかった」と言ってくれたのが嬉しかったです。

Q仕事をする上で、どんな事が大変ですか？

　やっぱり正解不正解がないから、それを模索しながら支援する事は楽しい反面、や

っていて難しいし、大変だなと思います。

例えば、スイッチでのタブレット操作を利用者と練習しているのですが、そのスイッチの置く場所に悩んでいます。スイッチは利用者の顎で押すことが出来る様に、車いすのヘッドレストに付けています。利用者とも相談しながらやっているけれど、なかなかうまくいきません。前任の職員からスイッチの位置が課題と聞いていて、来てくれている先生とも色々な工夫をしながらやっているつもりです。しかし、スイッチが反応しなかったり、一回目は上手くいっても、二回目は、顎の当たり具合が違って、思ったように操作できないことで利用者も、（もどかしさから）イライラする事があったりして、今はそれが一番難しいです。

利用者自身の入力するタイミングはあっていると思うので、あとはスイッチの感度だけだと思うのですが…。どうにかしてあげたいなって気持ちがあります。

Q今後どんな職員になりたい？また理想像などあれば教えてください。

正直、想像がつきません。寄り添うっていう言葉も良く分からないですけど、利用者から信頼される職員ですかね。それに先輩職員みたいに、たくさん引き出しが持てるようになりたいです。引き出しが多いと、活動ももっと面白く出来るのかなって思っています。

活動だけに限らず、現場を回すアイデアというか、そういうやり方があるのかって、先輩を見て思いました。利用者に対する支援の方法だったり、福祉の知識や情報だったりもたくさん知っている。先輩は趣味とかも多いから話の引き出しも多く、利用者や家族との会話に繋がっているのだと思います。自分から発信できる人、自分から「こうしたらどうですか」と言える人になりたいです。

Q最後に職場のアピールがあれば。また今後就職を考えている方に向けてのメッセジーをお願いします。

どんな所なのか一回見学に来て知って欲しいです。介護の知識に限らず、人間的に成長できるところでもあると思います。言葉だけでは伝えられないし、イメージが変わると思うので気になる方は是非見学に来てください。

▶スイッチでタブレット操作をしている様子

「ＪＯＹ２フェスタ開催しました」

４年ぶりの開催となった今年は、「帰ってきたＪＯＹ²フェスタ～笑って、触れて、交われみんなの心～」と題して、沢山の「楽しいに触れられる」イベントを目指して実施いたしました。

ですが、天気はあいにくの雨予報。それでもみなさんのＪＯＹ²フェスタにかける思いもあってか、なんとか雨に打たれることなく、催しを全て終えることが出来ました。

また、会場ではたこ焼きや焼きそばといった様々な屋台に加え、出演者・来場者含めて皆様が盛り上がるステージイベントもあり、熱気に溢れていました。

これも各関係事業所の方々をはじめ、お手伝い頂いたパートナーの方々、ステージに出演して下さった団体、ＪＯＹ²フェスタに関わってくれた皆様のおかげです。協力ありがとうございました。

今後とも引き続きよろしくご協力を賜りたくお願いいたします。

ＪＯＹ²フェスタ実行委員長
草苅　大五郎

「ご寄付ありがとうございます」

川部　進様

佐々木　安江様

ファームランドみゆき様

（順不同）

「ＨＰ更新しています」

ホームページには、弘徳学園の概要、各事業所の紹介、そして広報誌のバックナンバー（白黒ページもカラーで掲載）などの情報が盛り沢山。また、各事業所のフェイスブックともリンクしていますので、お時間のある時にぜひ、一度ご覧下さい。

「編集後記」

私の家にはもうすぐ六か月になる猫がいます。主なお世話は両親。遊び相手は私です。今までは、ハムスターや金魚しか飼ったことがなく、子猫の相手はどうしたらいいのか分かりませんでした。仕事から帰ってきても、家の中に猫がいるなと思う程度でした。しかし、私の近くに来て遊んでほしそうな猫を見て、玩具で遊んでいくうちにかわいいかもしれない、と思うようになりました。猫も「私＝遊んでくれる人」となったようで、近くで待っていたり、玩具を置いて物陰に隠れていたりとする姿が日常に。朝起きて私の部屋が開いた音で、二階まで迎えに来てくれる姿がとてもかわいいのです。今まで私は、猫か犬かどちらが好きかと言われると「犬！」と即答していましたが、今は少し迷います。

猫が我が家にやってきて、喉を鳴らして甘えてくる姿、遊んでもらいたいと物陰で玩具を投げてもらう事を待っている猫の姿がこんなにも愛しいとは思いませんでした。今の私の癒しです。かわいさのあまり猫と遊ぶ玩具を買いすぎて溢れかえらないよう気を付けていきたいと思います。

船橋　郁美